

花と木の実践養成教室

令和5年3月14日（火）

種から育てる花づくり

《一年草と二年草の性質》

種をまいてから1年以内に花を咲かせて枯れる植物を「一年草」と言います。種をまく時期によって春まき一年草、秋まき一年草に分けられます。

また、種をまいてから1年以上2年以内に花が咲いて枯れるものを二年草といますが、育て方は一年草とほぼ同じです。

一～二年草は、寿命が短い分成長が早く長期間にわたって花が咲き続け、個性的で華やかな花が多いのが魅力です。

種まきについて

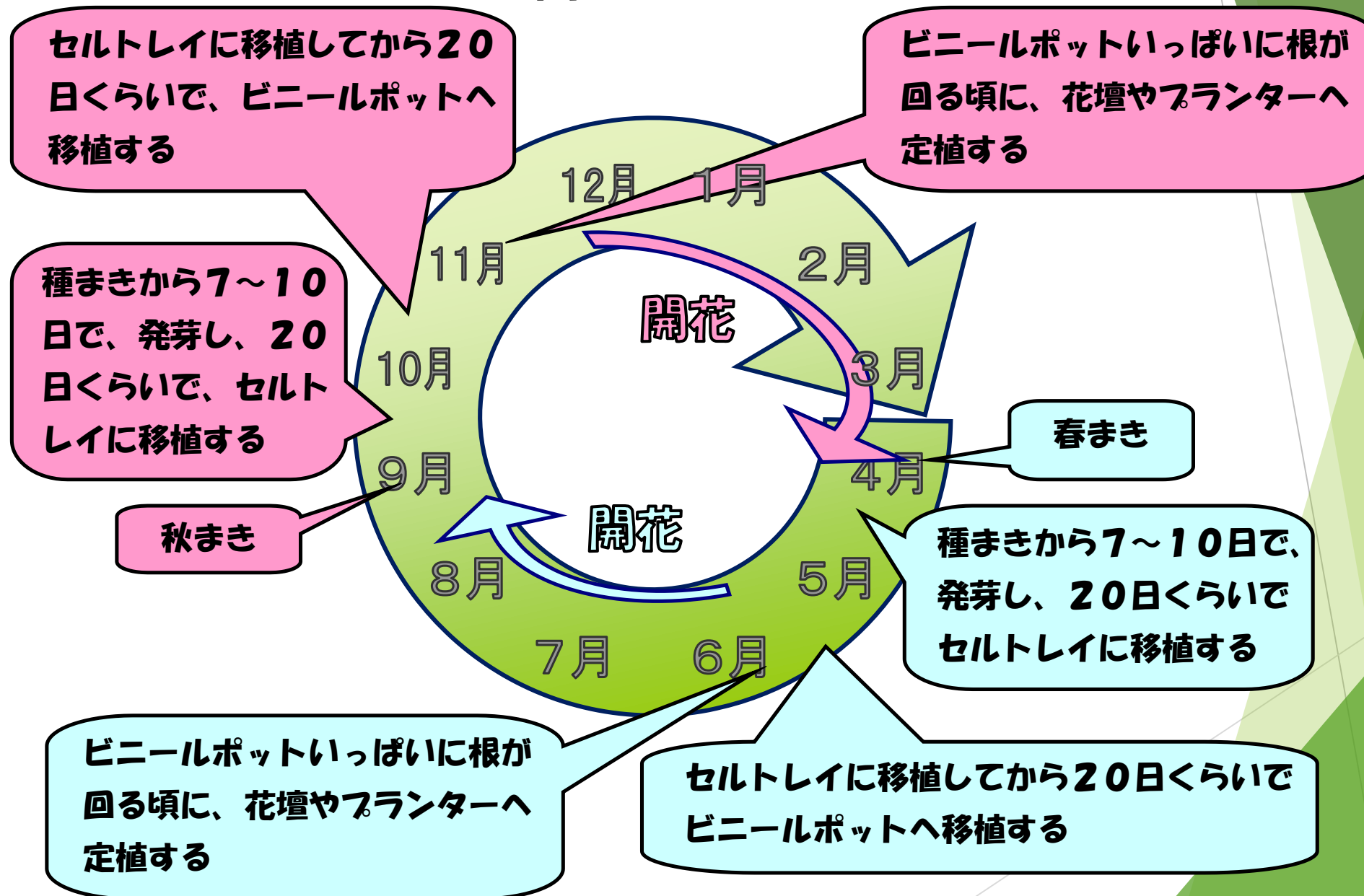
《草花の春まき・秋まき》

日本の気候は四季がはっきりしていることから春まきと秋まきに分けています。

春まき草花・・・3月の彼岸以降、染井吉野の咲く頃からが目安とされています。染井吉野の桜が咲く頃の平均気温は、15℃～20℃です。

秋まき草花・・・早まきは、8月下旬～9月上旬頃からまきますが、9月中旬～10月上旬にまく種類もあります。

一年草のライフサイクル



《種の保存方法》 5℃前後で、低温処理します。

《種まき後の管理》 水は、腰水（底面吸水）にしてよくしみ込ませて暖かい半日陰に置き、種を乾かさないようにします。

《鉢上げの時期》 移植を嫌う種類や生育の早い種類があるので、性質を理解した上で、鉢上げをします。

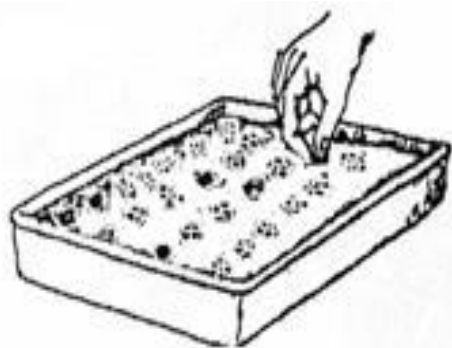
《日長時間の関係》

日が徐々に長くなる事によって花が咲く長日性植物と、短くなる事によって花が咲く短日性植物があり、日照時間の影響を受けない中性植物もあります。

様々な方法があります！

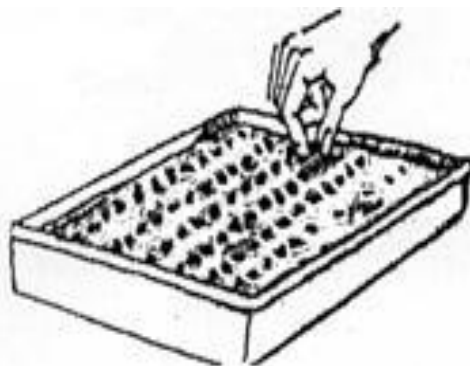
【タネのまき方】※ 強風時には蒔かない。

大型種子



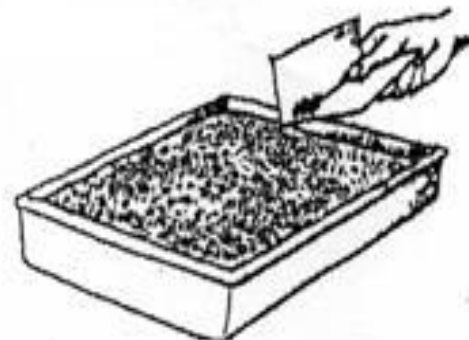
点まき

中型種子

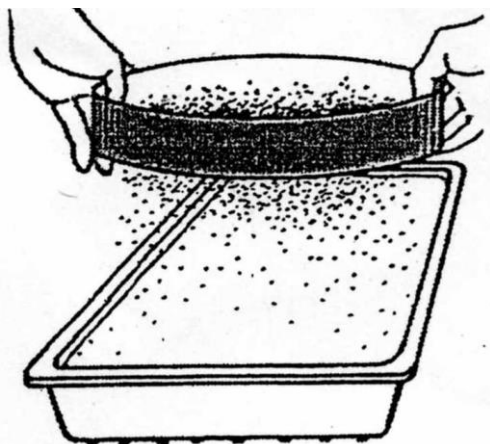


筋まき

小型種子



ばらまき



種まきが終わったら、フルイを使って細かい用土で覆土します。（種まき培土、バーミキュライト、水苔など）
覆土は、草花の種類によりますが、一般的には種子
が隠れる程度です。

水やりは、微細な種子をまいた場合、ジョウロなどを使って育苗箱の上から水を与えると、種子が流されてしまうので、底面吸水で水分を吸収させます。

十分に水を与えたら、直射日光を防ぐ意味と湿度保持の目的で濡れた新聞紙をかけて発芽を待ちます。中が蒸れないようにすき間をあけておきます。

《植替え》

本葉が2～4枚になったら、セルトレイに移植を行ないます。
(茎の半分ぐらいが土中に入る程度)

ただし、移植を嫌う花は、直接セルトレイに種をまきます。
セルトレイに移植した苗の根鉢が、崩れないようになったら、ビニールポットへ移植します。

(本葉が、5～8枚ぐらいになったら定植してもよい)

**熱心にメモを
取られています！**



**実技でダスティミラーの
種まきをします。**

**種まき用資材のトレーに、種まき専用の土を入れます。
土は、予め水分を吸収しやすいように水を含ませます。**





土を均等に入れたら
水を吸水させます。

こんな感じです！





種を1マスに
一粒ずつ入れ
ていきます。



まき終われば、細かいバーミキュライトを種が
隠れるくらい敷き詰め底面から吸水させます。



後は、発芽を
待ちます。

